

【人・もの・コト】

生活教育の中でも、特に社会科や総合学習で、「地域にある〈人・もの・コト〉」を発見する・かかわる」などとよく使われるフレーズです。

子どもや地域、また自分の教育実践を見ると、忘れてがちなことを思い出し、全体像を描くうえで大変有効な視点です。

近代の教育は、知識や学力、つまり〈コト〉に集中する悪い傾向があります。人やものど切り離されたままでは、〈コト〉の内容自体も単なる記号や徳目に墮していきます。

コペル君は、〈人間分子の関係、網目の法則〉を発見します。粉ミルクが搾乳から赤ちゃんと飲むまでに、オーストラリアから日本まで、多くの人の手を介して届けられているコトが発見されています。人と人の関係を、市民でとどまらず、生産・労働という〈もの〉を介したつながりとしてとらえています。

算数で抽象的なかけ算という〈コト〉を学ぶときでも、それを話し合いという〈人〉の関係に乗せ、また

生活教育 キーワード

チヨコレートなど生活の中にある〈もの〉で使われることで、〈コト〉の理解は深まります。

哲学的には、アリストテレスのテオリア、プラクシス（社交）、ポイエシス（制作）に対応し、ペスタロッチだと、〈頭・手・心〉と対応します。ヘルバ

ルトが、ポイエシスや〈手〉を欠落させて、陶冶と訓育（教科と特別活動）だけで〈教育学〉を組み立ててしまったので、生活教育はこの回復をはかり、〈もの〉を強調して、生産・労働や芸術制作、教室への持ち込みを重視してきました。

東日本の復興再生にあたって、資源という〈もの〉の視点を持つている教育が決定的に重要です。

（研究部・加藤聡二）

参考文献

- ①吉野源三郎『君たちはどう生きるか』（岩波文庫）岩波書店、一九八二年（原書一九三五・昭和十年）。特に八十四ページ。
- ②荒木寿友『学校における対話とコミュニケーションの形成 コールバーグのジャスト・コミュニケーション実践』三省堂、二〇一三年。特に一四八ページ。